

# ウィリアム・モリスと反修復運動

藤 田 治 彦

はじめに

古建築物保護の運動家としてのウィリアム・モリス (William Morris, 1834-1896) は、ヴィクトリア朝イギリスを代表する詩人のひとりで工芸家、そしてデザイン思想家であったモリスほど、あるいは社会主義者としてのモリスほど、知られてはいない。比較的に広く知られ、あるいは当然のこととして推定されているのは、モリスの古建築物保護または反修復の思想は、彼の芸術論や社会観、労働観などと同様に、ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) の影響下に形成されたものである、ということぐらいである。だが、反修復の論議はラスキンを嚆矢とするものではない。ラスキンの『建築の七灯』第六章「記憶の灯」の末尾で繰り広げられるような反修復論、あるいは少なくとも古建築物の改修を巡る論議は、イギリスではそのはるか以前から行われ、詩にも詠まれていたほどであった。バイロン (George Gordon Noel Byron, 1788-1824) の長編物語詩『ドン・ジュアン』第十六詩編では、当時「修復 restoration」

と呼ばれていた行為が揶揄的に詠じられている。頑丈そうな中世の僧院の点検に呼ばれるやいなや新築図面を作って古い建物を引き倒れているのである<sup>(2)</sup>。『ドン・ジュアン』はラスキンがまだ幼少ころの一八二四年に出版されたバイロンの没年の未完の遺作であった。このような例をも含めてラスキン以前にさかのぼり、十八世紀末から十九世紀後半にまで及ぶイギリスのゴシック・リヴァイヴァルというより大きな時間と思潮の変化のなかでモリスの古建築物保護の思想および活動を位置づけるとともに、モリスの思想と生涯における反修復運動の意義を再検討することが本論の目的である。

## 反改修論

モリスらによる一八七七年の古建築物保護協会 (The Society for the Protection of Ancient Buildings (SPAB)) の創設へと至る歴史的建造物の保存と修復をめぐる論争は、その源泉をゴシック・リヴァ

イヴァル初期の建築家 Architect と好古家 Antiquary とのあいだの対立にまでさかのぼる、一世紀近い歴史を有する。現代の考古学者と区別するために、趣味的な響きのある好古家という言葉を使っておくが、彼らの団体である好古協会 The Society of Antiquaries は決して単なる趣味の集いではなく、一七一八年に王立協会から最初に独立を果たした学術団体であった。好古協会は中世の建築物を考古学的物件つまり学術的興味の対象と見なした。そして彼らは、それに反して、中世の建築物を規則性や一貫性といった近代的理念に従わせようとして、それらの建築的な整合性や明快さを改修工事によって高めようとする建築家と対立したのであった。

歴史的建造物の保存と修復を巡る論議は一七八九年に『ジェントルマンズ・マガジン』誌上で始まった。十八世紀のイギリスを代表する建築家のひとりワイアット (James Wyatt, 1746-1813) によるソールズベリ大聖堂の改修工事に対する、好古協会の会長ガフ (Richard Gough, 1735-1809) による一連の抗議の投稿がそれである<sup>(3)</sup>。ガフはワイアットによるソールズベリのふたつの付設礼拝堂および独立鐘楼の撤去と聖堂内部の再配置ならびに聖堂構内の整地などに反対の意見を表明した。歴史的建造物というものは時代の流れの中で、時には増改築を施され、構造体としても様式上も多かれ少なかれ混合的なつぎはぎ状のものとなっている場合が多い。にもかかわらず、ワイアットは勝手に猥雑物と見なしたものを撤去し、特定の時代、この場合は十三世紀の状態を念頭において改修を施し、自らは「改良 (improvement)」を行ったつもりでいた。

ワイアットはソールズベリに続いてグラムでも同様な改修工事の実施を提案し、一七九五年に調査を実施していたが、ガフらが再び

抗議の声をあげた。これは好古協会の出版物のための歴史的建造物の図版制作を担当していたカーター (John Carter, 1748-1817) の通報による対応であった<sup>(4)</sup>。ガフらはグラムの主教にも働きかけ、改修の一部は回避された。カーターは既に『本王国に現存する古彫刻古絵画の諸典型<sup>(5)</sup>』や『イングランドの古建築物の景観<sup>(6)</sup>』などの著書もある歴史研究家で、調査にフィールド・ワークを導入し、当時出版に着手していた主著『イングランドの古建築<sup>(7)</sup>』などを通じて、イギリスの古代・中世建築史研究を実証的レベルにまで引き上げた人物である。建築実務よりも調査研究や作図作画の仕事を好んだようだが、元来カーターは建築家であった。カーターの例が示すように、これらの中世の大聖堂を巡る論争は、建築家と好古家とのあいだの争いであると同時に、建築実務と歴史研究および好古趣味とのあいだの確執でもあった。この改修をめぐる論争の背景には、改修工事のみならず、十八世紀末における歴史研究の進展があったのである。

ソールズベリやグラムの大聖堂の改修は当時の好古家や学者たちのあいだでは不評だったが、好古協会の内部は意見統一されていたわけではない。一七九七年の五月にワイアットは同協会の会員に推挙され、一旦は退けられたものの、次回の投票でフェローに選出された。会長ガフはそれに抗議して同協会を辞任した。一方、カーターは協会にとどまり、牧師ミルナー (John Milner, 1752-1826) らと協力して、配慮に欠ける改修から歴史的建造物を守る努力を続ける。翌一七九八年にミルナーは「ソールズベリ大聖堂に例示される大聖堂の改修における現代様式の功罪」について考察した小論を執筆し、それを好古協会の会合で発表しようとしたが、協会の評議会はそれ

を許可しなかった。協会内での会員による特定会員批判の回避などの、一種の政治的な判断だったのであろう。その『ソールズベリ大聖堂改修功罪論』は一八一一年に第二版が出版されている<sup>(8)</sup>。初版の刊行年は不明だが、何れにしてもミルナーの『ソールズベリ大聖堂改修功罪論』は歴史的建造物の改修や修復に関して本格的な論議を展開したイギリスで最初の出版物である。その主要な内容は、新たな典礼上の必要性や新しい好みが、現代つまりミルナーの時代における中世の聖堂の建築上の取り扱いにどの程度の影響を及ぼすべきかを問うものであった。

ミルナーの観点および論点は基本的に、その聖堂が既にモニュメントと化しているものか、それとも今もなお機能を果し続ける建築物なのかを考えよということであった。ミルナーは、もし、ある建築物がいにしへの芸術のひとつの作例として非常に重要であるならば、そのむやみな改修は許容されえないと結論した。聖職にあったミルナーは英国国教会の典礼を否定したわけではなく、非常に古い聖堂も近代教会の諸要求と矛盾するものではないと考えていた。ミルナーは次のように述べている。「それらの記念碑的建造物を破壊したり醜悪なものにしたりすることに、いかなる理由が申し立てられようとも、それらの損失は、ひとつたりとても貴重な国民的遺産の損失なのであることを、そしてそのような遺産の研究にとっての深刻な損害なのだということを否定する人はいないであろう。というの、ひとつのアーチ、天蓋、壁龕、小尖塔、線形、そして一体の彩色彫刻にも、事実や年代、様式や習慣に関する有効な情報へと導かぬようなものはないということは、周知のことだからである<sup>(9)</sup>。」ここにはその後の歴史的建造物の保存運動にとって重要な

ふたつの見解が示されている。ひとつは、古い時代の聖堂は英国国教会の所有物であるだけでなく、国民全体にとってのモニュメントでもあるという見解、もうひとつは、歴史的建造物は碑銘の入った記念碑や古写本などと同様に、ひとつの歴史的記録なのだ、という見解である。

### 改修から修復へ

十九世紀前半のイギリスにおける歴史的建造物、なかでも中世の聖堂の取り扱いが改修から修復へ、あるいは改修ではあっても修復の性格の強い改修へ、という方向へ変化して行った。その背景には既述の十八世紀末の反改修論議があり、さらにその後には建築史研究の進展があった。カーターの研究にリックマン (Thomas Rickman, 1776-1841) の研究が続いた。一八一七年に出版されたリックマンの著書『イングランド建築の様式判別の試論』は中世建築の様式上の変化を定義しようとした最初の試みのひとつであり、同書でなされた「初期英国式 Early English」「装飾式 Decorated」「垂直式 Perpendicular」という編年史的分類はその後、イギリスのゴシック建築の様式名として定着して行くことになる<sup>(10)</sup>。これらのフィールド・ワークや文献調査に基づいたより精密な様式の確定は、建造物の様式上の変化への興味を高め、様式的観点からの修復を推進する力ともなったのである。

もうひとつの背景に、宗教と宗教建築上の変化がある。一八三〇年代になると建築家ピュージン (Augustus Welby Northmore Pugin, 1812-1852) は、建築などの様式は特定の社会のひとつの表現なのであるが、過去の特別な様式もその社会の価値観と宗教自体が

復興されるならば、やはり復興されうるという考えを導入する。特別な様式とはこの場合、ゴシックであり、イギリスのゴシック・リヴァイヴァルはピュージンの熱狂的な設計および出版活動の展開とともに世紀半ばに最盛期を迎える。しかしながら一八三五年にローマン・カトリックへと改宗していたピュージンが英国国教会に直接的な影響を及ぼしたとは考えにくい。

改宗後まもないピュージンがイギリス各地でローマン・カトリック教会のための仕事を盛んに手掛け始めたころ、聖堂建築への興味を深めることを目的に、ひとつの学生組織がケンブリッジに誕生した。一八三九年創設のケンブリッジ・カムデン協会 The Cambridge Camden Society である<sup>(12)</sup>。その会員のほとんどは神学を学ぶ学生で、卒業後に各地で聖職に就いてからの活動の継続と発展を考え、機関誌『イクリージオロジスト』を創刊した。「イクリージオロジスト」とは「教会建築学者」、「教会建築の学徒」ほどの意味で、同協会は一八四〇年代後半にはロンドンに本拠を移してイクリージオロジカル協会 The Ecclesiological Society となる<sup>(13)</sup>。

ケンブリッジ・カムデン協会は上記のようなピュージンの思想を自分たちの思想の一部として取り入れた。だがその一方で、高教会派英国国教会をピュージンにとつてのローマン・カトリックの位置に据え、宗教儀式の復興もローマや教皇から分離して考えることができる<sup>(14)</sup>。同協会は歴史的な聖堂の修復に関しては典礼重視の方針を示し、中世の宗教建築物の修復や再装飾などはすべての良き英国国教徒の義務であると説いた。歴史的建造物に対するミルナーの好古家的な姿勢を、ケンブリッジ・カムデン協会は退けて行くことになる。好古協会のミルナーは牧師ではあったが、英国国

教会にとつての必要性よりも歴史や考古学を重視した。それに対して、ケンブリッジ・カムデン協会は、英国国教会の宗教的使命を歴史の上に位置させたのであった。

ケンブリッジ・カムデン協会は、聖堂の改造をむやみに推進したわけではない。彼らにとつて歴史的な正当化は重要であり、したがって、彼らの歴史的な聖堂への基本的アプローチは「修復」ということになる。「修復する」ということは、老朽や、災害や、不適切な改修によって失われた元来の姿を回復させることである<sup>(15)</sup>と機関誌『イクリージオロジスト』は述べている。同協会はある中世の聖堂の最初の状態を再現するためには、同じく中世のものではあってもその後の施工部分は除去されねばならぬ場合もあると考えていた。ただし、例外として、後世の施工部分でも、質の高い部分は保持されるべきだとした。したがって、同協会は原形への修復と、後補部分を含めての中世の聖堂の保存修復というふたつの修復観とともに認めていたことになる。

だが、少なくとも一八四一年の段階では『イクリージオロジスト』誌の編集者は、原形への修復をより正当なアプローチと考えていた<sup>(16)</sup>。この原形への修復の推奨は、当時の英国国教会を支配していた危機感を想像するならば理解できる方針である。協会創設当時、英国国教会は信徒数を減じ、逆に、非国教会系諸派やローマン・カトリックが勢力を拡大し、政治においてもリベラリズムが力を獲得しつつあった。聖堂の原形への修復は英国国教会の復興と重ね合わされていたのであった。

またケンブリッジ・カムデン協会（後のイクリージオロジカル協会）は、宗教上の理由に基づき、古い聖堂の内部レイアウトなどの

大幅な再構成を推奨するとともに、教会建築学的に「正当な」新しい聖堂の建設を促進した。さらに同協会の人々は特定の建築様式を好んだ。初めは十三世紀の、後には十四世紀のゴシックがそれである。このような特別な様式にまでおよぶ論議や選択は、既述のように建築史研究の進展がもたらしたものであり、それが当時の様式的観点からの「修復」という概念を強化した。だが、それは実際には何世代にも時には何世紀にもわたる歴史の流れの所産である古建築物を、ひとつの仮説上の理念的形態に従わせる「改修」または「改造」であった。一例をあげるならば、「退廃期の様式」と見なされた「垂直式」の増築部分はしばしば撤去され、その建物のより古い部分と一貫性を有する様式に改築された。「垂直式」とは十四世紀半ばに形成され十六世紀まで用いられた後期ゴシックの建築様式である。

オックスフォードにも同様の研究会が設立されていた。オックスフォード・ゴシック建築研究評価推進協会 The Oxford Society for Promoting the Study and Appreciation of Gothic Architecture、別名、オックスフォード建築連盟 Oxford Architectural Association である。この組織はケンブリッジの協会よりも柔軟な修復観を有していた。歴史的建造物は特定の過去の状態、つまり原形に復帰させるべきであるというケンブリッジ・カムデン協会の方針に対する反論となる一八四六年のフリーマン (Edward Augustus Freeman, 1823-1892) のパンフレット『聖堂修復の諸原理』は初めオックスフォード建築連盟の会合で発表されたものであった<sup>(18)</sup>。ロンドンに本拠を移しイクリージオロジカル協会と改称したばかりの旧ケンブリッジ・カムデン協会は、一八四七年五月の

集会でフリーマンの主張の内容を論議した。同協会の機関誌はそれに対する批評を掲載し、皮肉なことに、フリーマンの思想はおもにその批評文を通じて広められることになる。

『イクリージオロジスト』誌の批評家は、フリーマンが説くいくつかの異なった修復保存のアプローチを解説するために、「破壊的 destructive」、「保全的 conservative」、そして「折衷的 eclectic」方法という三つの言葉を用いた。「破壊的」方法とは、聖堂の創建当初の構想を考慮せずに新様式で増改築を行った中世後期の工人のアプローチを継承する方法である。「保全的」または「保守的」方法とは宗教改革期以後の増築部分のみを除去し保存する方法である。「折衷的」方法とは創建当初からの部分を新しい工事を施すことや、古い工事部分のコピーによる修復を容認する方法である。『イクリージオロジスト』誌は「折衷的」アプローチをより高く評価した<sup>(19)</sup>。フリーマンのパンフレットは『イクリージオロジスト』誌の批評家が行ったような種々の手法の提言を意図したものではなかった。フリーマンは十九世紀のゴシック復興運動によって高められた歴史的自意識の問題に論及しながら、以下のように修復の思想的側面に考察を加えている。中世人は近代人が持つような「好古の精神」を有していたわけではない。したがって、歴史に関する知識の飛躍的増大が歴史的建造物の価値に対する新たな意識を生み出した近代(現代)においては、中世後期の工人たちが行ったような「破壊的」な増改築の方法は受け入れられないと考えた。確かに、修復論議自体が近代の歴史的自意識の所産なのである。したがって、他方、その十九世紀において典礼上の変更が生じるたびに聖堂内部のレイアウトその他の建築上の変更を行うことは考えにくく、ケンブリッジ・

カムデン協会が推奨したような典礼中心の修復あるいは改修論も、フリーマンには容認しがたいものであったことは確かである。

### 修復から保存へ

フリーマンは一八四六年のパンフレットを改訂増補する形で一八五二年に『古記念建造物の保存と修復について<sup>(20)</sup>』を出版した。書名が示すようにここで初めて保存と修復が一種の対概念として意識されたことになる。換言するならば、それは建築におけるオリジナルとレプリカとの違いが意識されるようになったことを示している。前著ではそうではなかった。フリーマンは近代的要求により歴史的建造物が改修されたり過去の特定の時代の姿に強引に修復されることに対して疑問を表明していたが、レプリカがオリジナルに劣るとは考えていなかった。むしろ、ある様式の基準となるような建造物や独創的なデザインの部分は後世のために複製されるべきだとさえ考えており、逆に、そのような特別な価値が認められないものは歴史的建造物ではあってもその管理者が適切だと考える方法で扱われればよいと考えていた<sup>(21)</sup>。一八五二年の出版物ではレプリカとオリジナルとの相違が強く意識され、歴史的建造物の取り扱いに対する提言もより精緻なものとなっている。それはいわば建造物の性格と状態に応じた保存と修復との使い分けの提言である。例えば中世の古城のように、既に機能を果す建物であることを止め、人間にとっては建築史上の重要性や詩的想像力を喚起する力の偉大さのためにのみあるものはそのまま保存されるべきである。また、中世以来の教区聖堂のように歴史的建造物ではあるが機能を果し続けている建物の場合には、その詩的、芸術的連想もその機能上の連想と

不可分の関係にあるので、むしろ修復されるべきである、といった具合である。オリジナルとレプリカとの相違を強く意識するようになったフリーマンの主張のこのような変化の要因の確認には、さらに関連する資料の分析を続ける必要がある。だが、一八五二年というその改訂増補の時期から推定するならば、当時出版中の『ヴェネツィアの石』や一八四九年出版の『建築の七灯』など、ラスキンの著作がその変化の背景にあった可能性は非常に高い。『建築の七灯』第六章第十八節においてラスキンは次のように語る。「一般大衆によっても、また公共の記念建造物の世話をする立場にいる人物によっても、『修復』という言葉の真の意味は理解されていない。それは建造物の蒙りうるもつとも全体的な破壊、ひとかけらの断片さえも残らない破壊、破壊されたものの虚偽の記録を伴う破壊である。この重大な事柄で私たちは自らを欺くことは止めよう。建築においてかつて偉大であったものがあるいは美しかったものを修復することは、死者をよみがえらせることが不可能であるように、まさに『不可能』なのである。既に私がその全体的なものの生命として主張したものは、工人の手と眼によつてのみ与えられるあの精神は、決して呼び戻すことはできないのである<sup>(24)</sup>。」

これは修復に対する徹底的な批判である。フリーマンの提言のように妥協的なところはまるでない。「修復について語らせるな」と抗議するラスキンは「最初から最後までそれは虚偽なのである<sup>(25)</sup>」とまで断言した。また、ラスキンは歴史的建造物の制作の主体を、図面を書いた建築家ではなく、石を削り組み上げたひとりひとりの工人に見ていることも特徴的なことである。ラスキンにとっては建造物の歴史的価値も、その平面計画や構造や空間ではなく、む

しろその表面にある。またラスキンは次のようにも述べている。「古い建物には何らかの生命が、かつてそこにあったものの、そしてそれが失ったものの、何か神秘的な暗示があった。雨や太陽によって残された柔らかな線に、えも言われぬ甘美さがあったのである(26)。」ここに読み取ることができるよう、反修復論、保存論にとつてさらに重要なのは、歴史的建造物は歴史的記録ではなく、歴史そのものなのだ、という見解の出現であろう。新著『ヴェネツィアの石』の出版を待つまでもなく、修復に代わる保存の論理的基盤はラスキンの『建築の七灯』によって築かれたのである。それ以後、モリスらによる古建築物保護協会の創設に至るまで、ラスキンによる非妥協的な主張の非現実性を批判する声は上がったが、その基盤を揺るがすほどの議論には至らなかった(27)。

### 古建築物保護協会の創設

以上のような経過をたどり、歴史的建造物の修復に代わる保存の論理的基盤は十九世紀の半ばにほぼ成立した。修復に反対し保存を実際に推進する組織、古建築物保護協会は四半世紀以上を経た一八七七年に創設される。運動としての成立は決して早くはなかった。古建築物保護協会の創設はモリスという個人の発案と行動に待つところが大きい。外的要因に目を向けるならば、それを促した受動的要因としては修復の継続と開発による環境悪化などがあり、積極的要因としてはそれらに対抗しての環境保護の気運の高まりなどをあげることができる。ナショナル・トラストの母体のひとつとなる共有地保存協会 The Commons Preservation Society は一八六六年に創設され、古代遺跡の保護に関する法案の審議も一八七〇年

代には始められている。また、古建築物保護協会の創設を促進した最大の要因も、遅らせた最大の要因もともに十九世紀イギリスの建築家たちの保存と修復に対する二面的な姿勢であったのかもしれない。スコット (George Gilbert Scott, 1811-1878) ストリート (George Edmund Street, 1824-1881) ユアンソン (John Loughborough Pearson, 1817-1897) といった世紀中葉に活躍した建築家の多くは彼らの先人たちよりも建築の歴史と修復に関してより深い知識を有するようになっており、彼ら自身、無思慮な修復に対して抗議する場合さえあったほどである。十九世紀にもっとも多く、聖堂の修復を手掛け、十八世紀のワイアットに対応する、あるいはそれ以上の「修復」という名の破壊の張本人とされてしまった観のあるスコットなどは、低教会派の出身ということもあつてか、一八四三年のある報告書では英国国教会の典礼上や神学上の諸要求が修復の指針となるべきではないとさえ記している(28)。むしろスコットは修復よりも保存の重要性を強調していた。ただし、スコットが語る保存は現在の、あるいはモリス以後の保存とはかなり異なっていたことも事実である。「保存 Preservation」という言葉でスコットが意味するのは、オリジナルなデザインの保持のことであり、そのデザインによって加工され組み立てられた古来の材料の保存のことではなかった。また、さまざまな時代を経て建設された聖堂の歴史的価値を認識していた彼らでさえも、一貫性という名のもとに中世の構築部分を破壊する誘惑に打ち勝てたわけではなく、中世以外の古建築物にはほとんど敬意を表することさえなかった。

モリスはラスキンの著述に導かれて熱烈な反修復運動家となった(29)。モリスは一八五五年に友人、コーメル・プライス (Corneli

Price, 1836-1910) にあてた手紙に次のように書いてある。「……私  
たちはイーリーも見に行つたが、大聖堂には少々失望した。それは  
極めて良かれと思つて行われたのだから、まるで冗談のように、  
修復と呼ばれるものによつてだめにされている。(中略) 外部は幸  
いにもほとんど手が加えられていないので、外観のほうは内部より  
もはるかに美しく興味深い(30)。」当時モリスはオックスフォード大  
学在学中で、ラスキンの著作に読み耽つている最中であつた。ラス  
キンの『建築の七灯』は一八四九年に、三巻からなる『ヴェネツィ  
アの石』は一八五一年から五三年にかけて出版されていた。モリス  
は特に『ヴェネツィアの石』第二巻第六章の「ゴシックの本質」に  
深い感銘を受け、後にケルムスコット・プレスでその章を抜き出し  
て単行本として出版したほどである(31)。

修復に反対するだけではなく、歴史的建造物は修復ではなく保護  
あるいは保存されるべきだという積極的な主張もラスキンに既にあつ  
た。『建築の七灯』の第六章十九節の一部とモリスによる古建築物  
保護協会のマニフェストの一部とを比較してみよう。ラスキンは次  
のように語る。「諸君の記念碑的建造物に適切な注意を払つてい  
るならば、諸君はそれを修復する必要はないであろう。適当な時期に  
数葉の鉛板をもつて屋根を修理し、適当な時期に若干の枯れ葉や枯  
れ枝を水路から取り除いたなら、屋根も壁も朽廃から救われるであ  
らう。いにしへの建築物はよくよく注意して大切にせよ。諸君の最  
善を尽くし、いかなる価をもつてしても、あらゆる破損の力よりそ  
れを保護せよ(32)。」モリスによるマニフェストでそれに対応するの  
は次の部分である。「……私たちは嘆願しかつ要求する。修復では  
なく保護するようにと。日々世話をすることによつて崩壊の時を先

に延ばしてくれるようにと。」

ラスキンは修復に代わる保護という理念を指し示すのみならず、  
その指針をも既に示していた。「その弛めるところは鉄をもつて結  
束せよ。その傾けるところは木をもつて支えよ。補助物の不体裁の  
ごときは気にせぬほうがよい。手足を失つたままにいるよりは杖を  
ついたほうがましである(33)。」このように語る。それに対応するモ  
リスのマニフェストの一節は次の通りである。「支えたり、覆いを  
しているのが一目瞭然とわかるようなやりかたで危険な壁を支えた  
り、雨漏りのする壁を修繕したりするようにお願いする。」また、  
モリスは「後世のために」という目的と展望を述べてマニフェス  
トを結ぶが、これはラスキンの第二十節つまり「記憶の灯」の最終  
節に相当する(34)。マニフェストは次のように結ばれる。「私たちは、  
このように、そしてこのようにしてのみ、私たちの学問が落し穴に  
なるという不名誉から逃れることができるのであり、このように、  
そしてこのようにしてのみ、私たちの古建築物を保護し、それらを  
私たちの後に来る者たちのために教訓的であると同時に尊いものと  
して引き渡すことができるのである。」それに対応するラスキンの  
言葉は次の通りである。「……それらは私たちのものではない。そ  
れらの一部はそれらを建設した人々に属し、一部は私たちの後に来  
るべき人類のすべての世代に属するのである(35)。」

#### モリスにおける反修復運動

古建築物保護協会創設の直接の契機はスコットによるテュークス  
ベリー大聖堂の修復だとされる。しかし、それは創設につながる最初  
の行動、つまり修復計画に抗議するモリスによる『アスイニウム』



誌への投稿がなされた対象であり、ことの発端ではない。メイ・モリス (May Morris, 1862-1938) はその前年、一八七六年の夏にオックスフォードシャーの「バーフォードの聖堂がめちゃくちゃにされかけているのを見て、私の父は何らかの団結行動を起こすためのアピール執筆のメモを取った」と記している<sup>(36)</sup>。だが、モリスは直ちに協会創設には動かなかった。バーフォードに関するメモと『アスニウム』誌編集長への一八七七年三月五日付けの書簡およびそれに続く協会創設とのあいだに存在するのは、『デイリー・ニューズ』紙編集長宛ての一八七六年十月二十四日付けの書簡を初めてとする「東方問題」に関する投稿文や書簡類である。つまりモリスは「東方問題」への関与を経た後、古建築物保護協会の創設に踏み切ったことになる。

モリスはイギリスが、ブルガリアのキリスト教徒を迫害するトルコと戦うのではなく、バルカン半島に勢力を拡大するロシアの脅威に対抗するために逆にトルコを支援する側にまわるといふ非人道的な戦争の危機を前にして、初めて政治的行動を起こした。当時の保守党総裁デイズレイリ (Benjamin Disraeli, 1804-1881) の対外強硬論と戦争政策に反対する運動に参加したのである。モリスは自由党議員の提案により結成された「東方問題協会 The Eastern Question Association」に加わり財務委員として活動、ロシア・トルコ間の戦争が始まると「不正な戦争—イギリスの労働者へ<sup>(37)</sup>」と題した記事を『デイリー・ニューズ』紙へ投稿するなど積極的に行動した。

「東方問題」とは分裂の危機にさらされていたオスマン・トルコ帝国の混乱に乗じた欧州列強の干渉によって生じた一連の国際紛争

をさす。現在のボスニアヘルツェゴビナ問題とそれに対する西側諸国の介入にも連なる紛争である。バイロンが未完の『ドン・ジュアン』を残して死んだギリシアのトルコからの独立戦争もその一部であり、その二十年ほど前にトルコ駐在イギリス公使の職にあったエルギン伯トマス・ブルース (Thomas Bruce, 1766-1841) によるパルテノンの建築彫刻、いわゆる「エルギン・マーブルズ」のイギリスへの持ち出しなども、そのような「東方」の混乱に乗じたひとつの事件であった。モリスはバイロン以来のイギリスの遍歴の行動派ロマン主義詩人の伝統の上に生きていたのであり、その行動は社会改革を望み唱えても静観的なラスキンとは本質的に異なっていた。本論の冒頭で触れた『ドン・ジュアン』での修復批判、バイロンの出世作『チャイルド・ハロルドの巡歴<sup>(38)</sup>』のなかでの「エルギン・マーブルズ」批判などはともに、モリスの古建築物保護協会における活動と東方問題協会における政治活動を思い浮かべさせる一節である。ただし、モリスとバイロンの違いも指摘しておきたい。モリスはギリシア・ローマに憧憬を抱くことはなく、行動主義者ではあっても不戦運動家であった。モリスは、いわばギリシア・ローマに背を向け「ケルトの地に向かったドン・ジュアン」、より適切には「チャイルド・ハロルド」だったのである。

モリスは東方問題協会での経験から、政治的、社会的行動の指針と洞察を得、古建築物保護協会の創設に踏み切ったと思われる。創設の年、その委員会は五十六名で構成され、そこにはモリスの親友の画家や建築家のみならず、ラスキン、カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881)、ステイーヴン (Leslie Stephen, 1832-1904) などの有力な思想家・思想史家、そして六名の国会議員が既に含まれて

いた(39)。

モリスの活動は東方問題協会への参加、古建築物保護協会の創設を契機に大きく展開して行った。協会創設の年の十二月四日には最初の公開講演「裝飾芸術」をロンドンのオックスフォード・ストリートにあつた組合学習ギルドで行つた。その後、年毎に増加し、モリスの思想を広め、彼自身もさらにその思索を深める機会となつた一連の講演の最初のものである。古建築物保護の運動は、この重要な講演へのステップとなつただけではない。この講演のなかでもモリスは修復の問題に論及している。「……それらの古い建築物は何世紀もの時間をかけて、時には美的に、そして常に歴史的なものとして、改築され増築されてきたのであり、それらの真価は、その大部分はそこにあるのだ。(中略)しかしながら、近年、キリスト教会の熱意の大変な高まりが研究の大層な向上と時を同じくして起り、その結果、中世建築の知識の増大が人々にそれらの建造物にお金を費やさせることになつた。ところがそれは、単にそれらを修理するためではなく、つまり、それらを安全に、清潔に保ち、風が吹き込んだり雨水がしみ込んだりしないようにするためばかりではなく、何らかの理想的な完成の状態へと「修復」するためのものなのである。それは少なくとも宗教改革以後の、そして時にはそのはるか以前にそれらに起こつた事件のすべての痕跡をあわよくば消し去ろうとするのである。これは時としては芸術をかえりみずにまつたくの宗教的熱狂から行われているのだが、それ以上に、芸術を尊重したつもりで行われていることが多い。(中略)だが、この修復というもの、その試みが同時に破壊的なのであるのだから、達成不可能なものであるに違いない。私は、それらの何と大きな部分が芸術と

歴史を学ぶものにとつてはほぼ無用のものにされてしまつていかうかということ、ほとんど考えたくもないくらいである(40)。」

モリスは「裝飾芸術」において、芸術が大芸術と小芸術とに分離してしまつた現状、裝飾芸術の質の低下、その間隙をついた製造業者による粗悪な裝飾品および商業主義の蔓延を嘆く。そして、かつての理想的な状況の回復のために大自然と歴史を見ることの重要性を説く。モリスにとって古建築物は大自然に遠い都市部ではそれに代わるものであり、歴史そのものであつた。そこに学び、その偉大な過去を想うことを通じて、現代の醜悪さを再認識するべきである。そのようなデザインの教育を通じて高貴でかつ民衆的な芸術の出現を期するべきであるとモリスは説く。このように、「裝飾芸術」の講演は古建築物の保護をその中核に据えて展開され、モリスの一連の講演はここに始まり、モリスの芸術論はこの講演を基盤として成長を始めるのである。ペヴスナー(Nikolaus Pevsner, 1902-1983)以来、モリスには近代デザインの父という歴史的な位置が与えられていたためか、これまで反修復運動はモリスにとっては付随的な活動でもあるかのように扱われてきた。振り返るならば、修復ではなく保存の運動は、ある意味では反デザインの運動である。オリジナルな状態への修復とはそのデザインを基準に世界を見るものの見方であり、それに対し、風雨にさらされ、時の刻印を刻む古建築物の表面を尊重するのはアカデミックな古典主義のデザイン観ではなく、まして近代デザインのものの方ではない。だが、本論が示すように、古建築物保護の運動はモリスの全活動の中核をなしている。近代デザインそして近代世界におけるモリスの位置の確認には、反修復というもうひとつの視点が必要なのである。

## 註

- (1) 歴史的建造物の保存や修復の思想的基盤が確立されていない日本では、欧米の保存修復用語に対応する日本語の確定にさえ至っていない。Restorationには「修復」以外の訳が当てられることもある。一九八一年には歴史的庭園の保存に関するフィレンツェ憲章が起草され、翌年、歴史的建造物と遺跡の保存と修復の指針として一九六四年に決議されていたヴェネツィア憲章を補足するかたちで付記登録され、保存修復も建築物のみを対象とした行為ではなないことが国際的に表明された。その中で Restoration を Reconstruction などの言葉は当然使用されており、それらに対応する日本語も、建築物以外の対象にも適切なものが選ばれる必要がある。そのような観点から Restoration には「修復」を、Reconstruction は「再建」ではなく「復元」などの訳語を選ばれた。ちなみに、保存修復は絵画や彫刻などでも行なわれており、その点でも Restoration には「修復」をあてるのが妥当であろう。分野による違いは確かであるが、保存修復が文化的総体として理解されるべき現在、諸分野の関係者が共通の言葉を共有するなどの意義のほうが大であろう。
- (2) DON JUAN, Canto XVI, Stanza LVIII.  
There was a modern Goth, I mean a Gothic  
Bricklayer of Babel, call'd an architect,  
Brought to survey these grey walls, which though so thick,  
Might have from time acquired some slight defect;  
Who, after rummaging the Abbey through thick  
And thin, produced a plan whereby to erect  
New buildings of correctest conformation,  
And throw down old, which he call'd *restoration*.  
(From *The Poetical Works of Lord Byron*, London, 1961, p.849.)
- (3) *The Gentleman's Magazine*, 1789, II, pp.873-874, 1042, 1064-1066, 1194-1196. John Frew, "Richard Gough, James Wyatt and Late Eighteenth-Century Preservation," *Journal of the Society of Architectural Historians*, 1979, XXXVIII, pp.366-374.
- (4) カーターは一時ワイアットの仕事の現場監督を務めたこともあるが、一七八六年以来好古協会に積極的に協力、ワイアットより早く一七九五年には好古協会のフェローとなっていた。
- (5) John Carter, *Specimens of the Ancient Sculpture and Painting now remaining in this Kingdom from the earliest period to the reign of Henry VIII*, 2 vols., London, 1780-1794.
- (6) John Carter, *Views of Ancient Buildings in England*, 6 vols., London, 1786-1793 (John Carter, *Specimens of Gothic Architecture*, 4 vols., London, 1824. 本基本的は同一書)。
- (7) John Carter, *The Ancient Architecture of England, Including the Orders During the British, Roman, Saxon, and Norman Eras; and Under the Reigns of Henry III and Edward III*, 2 vols., London, 1795-1814.
- (8) John Milner, *Dissertation on the Merits of the Modern Style of Altering Ancient Cathedrals as Exemplified in the Cathedral of Salisbury*, 1811(written in 1798).
- (9) *ibid.*, pp.7-9.
- (10) Thomas Rickman, *An Attempt to Discriminate the Styles of English Architecture from the Conquest to Reformation*, London, 1817.
- (11) Augustus Charles Pugin and A.W.N. Pugin, *Examples of Gothic Architecture*, 1833. A.W.N. Pugin, *Contrasts*, 1836. A.W.N. Pugin, *The True Principles of Pointed or Christian Architecture*, 1841. A.W.N. Pugin, *Apology for the Revival of Christian Architecture in England*, 1843.
- (12) オックスフォードに学んだ好古家で歴史家のウィリアム・カムデン(William Camden, 1551-1623)は因らば命をなされた協会のメンバーであった。
- (13) 「教会建築学会」と訳すこともできるが、その組織の性格とメンバー・カムデン協会からの連続性を考慮して、本論ではその前身イクリー・オロシカル協会と記す。
- (14) 「高教会 High Church」派とは伝統、聖礼・聖式、権威などの役

- 割を重視するローマン・カトリックにより近い英国教会の一派  
マン・グロリー・カートリッジを指す。
- (15) *The Ecclesiologist*, I, 1841, p.70.
- (16) *The Ecclesiologist*, I, 1841, p.65.
- (17) Christopher Edmond Miele, *The Gothic Revival and Gothic Architecture: The Restoration of Medieval Churches in Victorian Britain*, New York University Ph.D. Dissertation, 1992, Pp.102-103.
- (18) Edward Augustus Freeman, *Principles of Church Restoration*, London, 1846.
- (19) *The Ecclesiologist*, VII, 1847, pp.161-168.
- (20) Edward Augustus Freeman, *On the Preservation and Restoration of Ancient Monuments*, 1852.
- (21) Freeman (1846), p.13.
- (22) Freeman (1852), pp.27-33.
- (23) John Ruskin, *The Stones of Venice*, London, 1849.
- (24) John Ruskin (E.T. Cook and A.Wedderburn ed.), *The Complete Works of John Ruskin*, London, Vol.III, 1903, p.242.
- (25) *ibid.*, p.244.
- (26) *ibid.*, p.243.
- (27) Charles Eastlake, *A History of the Gothic Revival*, 1872. この本の建築家による歴史研究が注目される。
- (28) George Gilbert Scott et al., *Report Addressed to the Committee of the Subscribers for Repairing and Restoring Boston Church*, Boston, Lincolnshire, 1843, p.6.
- (29) ラスキンの影響下に入る前からモリスには古建築物保護運動家となる素地があった。『建築の七灯』『ウエネツィアの石』などの影響を受ける以前の若きモリスの歴史的建造物に対する姿勢をうかがわせるものに、モールバラ・カレッジ在学中に姉エマに送った一八四九年四月十三日付の書簡がある (Edited by Norman Kelvin, *The Collected Letters of William Morris*, Vol.I, Princeton, 1984, pp.6-8)。拙論「モールバラのウィリアム・モリス」意匠学会『デザイン理論』第三十四号(一九九五年)に関連研究報告。
- (30) Norman Kelvin (ed.), *The Collected Letters of William Morris*, Vol.I, Princeton, 1984, pp.12-14.
- (31) John Ruskin, *The Nature of Gothic: A Chapter of the Stones of Venice*, Kelmscott Press, 1892.
- (32) Ruskin (ed. by Cook et.al., 1903), Vol.VIII, p.244.
- (33) *ibid.*, pp.244-245.
- (34) *ibid.*, pp.245-247.
- (35) *ibid.*, p.245.
- (36) William Morris(May Morris ed.), *The Collected Works of William Morris*, Vol.XII, New York, 1966, xiii.
- (37) A letter of October 24, 1876 sent by Morris to the *Daily News*. William Morris Gallery, London.
- (38) Byron, *The Poetical Works of Lord Byron*, London, 1961, pp.196-197 (Canto II, Stanza X-XV).
- (39) Society for the Protection of Ancient Buildings, *The First Annual Meeting of the Society. Report of the Committee thereat read*, 1878, pp.3-4.
- (40) Morris (ed. by May Morris, 1966), Vol.XXII, p.19.